

# きらりと光る 企業でありたい

— 深澤電工株式会社 —

# 職場 レポート

## EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



### 深澤電工株式会社

〒411-0951 静岡県駿東郡長泉町桜堤 3-6-14  
TEL 055-988-5131 FAX 055-988-5106  
URL <http://www.fd-kk.com>

注) 深澤電工株式会社では「障害」を「障がい」と表記していますので、本原稿の会話の部分は「障がい」としています。

社員が満足しなければ  
顧客に満足していただけない

第三一回アビリンピックの競技会場で、小豆色のジャンパーを着た応援の人たちが目に付いた。「町工場が大企業に勝ちたいです!」と話してくれたのは「深澤電工」の人たち。その心意気にひかれて会社を訪れた。

新幹線三島駅から山側へ車で一〇分ほど。晴れていれば、本社工場の背景に富士山の頂きが顔をのぞかせ、春には目の前を流れる境川の桜並木がみごとなアーチをつくる。

「深澤電工株式会社」の創業は一九六四年。創業者の三女の深澤優子さんと結婚した好正さんが、九五年に社長を引き継いだ。

「最初は電子制御装置を作っていたと聞いています。自動車の修理をしていた



深澤好正社長



深澤優子取締役

ことが、経営者としての役割だと思っています」

社内の組織図は、社員を上、社長を一番下に置く。

「社員が一番です。昔は顧客満足度を第一に考えていましたが、最近では社員が満足しなければ、お客様に満足していただくことはできないと考えています。社員が不満なのに、お客様にいいものは提供できません。社員は大切にしたいと思います」

創業者の先代社長は、「私たちの働きと、私たちの力で、私たちの生活を豊かにし、社会に貢献し、社業の発展に努めます」を社憲とした。

「ここ一、二年、社員満足度を上げるには、休み・お金・心、何が必要なのかと考えていますが、中小零細企業は休みも給料も少ない、将来性もないので、志の高い人間づくりをめざしています。奈良薬師寺のご住職などからレクチャーを受けたり、勉強会に参加して、先人のすばらしい考え方を会社に反映したいと思っています。感謝の気持ちを大事にしたいですね」

社長は会社周辺のゴミ拾いを五年間、毎日続けている。

「ゴミ拾いをすることによって、自分の心を強くしたいと思います。トイレも便器の中まで掃除しています。会社は八時一五分から始まります。でも女性は家

私が入社したのは七九年、社員は二〇名ぐらいでした。創業者の義理の弟が小児マヒで、会社で働いていました。そこから障がい者雇用が拡大してきたと思います。町工場では大卒・高卒の方はなかなか採用できません。ハンディがあっても能力の高い方はたくさんいますので、働ける方は雇用しようと考えたのだと思います」

時代の流れとともに、製造するものは変わってきた。現在、社員は五〇人。電子機器組立を主に、分析装置修理、人材派遣を行っている。

「うちはオムロンに育てられた会社です。かつては一社一業務で、親会社・子会社という感じでしたが、今は三〇社ぐらいから仕事をいただいています。大変な時期ですが、社員と助け合いながら何とか生き残っています。勝ち組負け組ではなくて、生きるか死ぬか。生きて継続することで社員とその家族を守っていく

事もあるので早く来るのは無理ですが、男性はほとんどが四五分前に出社して、全員で掃除をしています。会社の掃除は朝昼晩です」  
会社の建物は築二十一年だそうだが、床も手すりもトイレもピカピカ。整理整頓も「標準化」。事務関係、工場内の器具類がきちんと整理されている。

## その人に合った仕事を探し出す

社員の男女比は半々。知的障害者三人、聴覚障害者二人、内部障害者一人、身体障害者二人と、八人の障害者が働いている。社屋にはエレベーターがあり、バリアフリーのトイレもある。

「勤続年数は長いですね。ハンディがあってもすばらしい方がたくさんいますから、働きたいと思っている人には平等の環境をつくりたいです。足の悪い人は手を、手の悪い人は目を活用すれば、健常者と変わらないはず。その人に合った仕事を探し出すのが、私の役割です」  
知的障害者は、荷物の運搬、工程の準備作業、再資源の分別、掃除などを行っている。

「製造現場で仕事があれば、総務で



会社内は、見事に整理整頓されている。共有、個人使用の道具類が一目でわかる

ハンコを押すとか……。その仕事もないときは、会社をきれいにしておけば将来、きっと忙しくなると思って、ひたすら掃除をさせています。仕事がないのは社長の責任ですね」  
総務関係は、取締役の妻の優子さんが担当する。明るくさわやかで、社員から「優子さん」と呼ばれている。  
「私は奥さんと呼ばれるのは嫌でしたし、役職で呼ばれるのも嫌でした。今年



事務室、デスクの中もきれいに整理されている



入った社員もいますが、障がいのある人たちに意地悪をするような人はいません。家族的な雰囲気の中で働いているので、受け入れてくれる社員が多いですね」  
知的障害者とは家族ともやりとりする。  
「こちらは○と言ったことが、お母様には△と伝わるということがあったので、伝達事項は書いて渡しています。知的障がい



## WORKSHOP REPORT



北野光雄生産技術部長



階段をきれいにするのは  
西島正博さんと長澤英明さん



工場内を清掃する鈴木佳明さん



社長自らトイレ掃除

の二人はベテランで、一人は入社数年ですが、毎日、声かけをしています。ふき掃除も汗水流して一生懸命。言われたことはきちんとすることに頭が下がりますね。一から十まで言わなければなりません。できなかったことは私たちが言い忘れたことだと思ふようになったら、気持ちすがすごく楽になりました」

### 大企業に負けない技術力で

深澤社長がアピリンピックに参加しようと思ったのは、五年ほど前のことだった。「県大会に出場しませんかと言われて、三人出ました。植松が四年前の山口大会の電子回路接続で銅、香川大会で銀、一昨年の千葉大会で金メダルでした。打倒デンソーで頑張りましたが、そのときはデンソーが二位、三位がオムロン太陽で、親会社に勝ったのがうれしかったですね。次の世界大会の強化選手に選ばれればと思っています」

昨年の茨城大会には社長自らが運転して応援に駆けつけた。

「もともと力量がある人たちですが、全国大会で通用したことで、私どもがやってきたことは間違っていなかったと自負しています。また、世間に自慢できる社員がたくさんいることは非常にいいことです。今回は入賞できませんでしたが、

次回は知的障がいの人たちのアピールも含めてビルクリーニングに参加したいと思います」

職場を回ると、あちこちから「こんにちは」と声がかかる。障害者を代表して四人のお話を。

「北野は部長として生産技術の管理をしています。彼がいたから、会社がここまでになったのです。人間力、技術力が素晴らしいです」と社長。

北野光雄さんは入社三一年目。生産技術部部長で、かつて優良障害者厚生労働大臣表彰を受けた。

「工業高校を出て電気のが好きでしたので、地元浜松で就職先を探しましたが、障がい者を雇うという会社はありませんでした。ここに就職したら、すでに障がい者が働いていました」

最初はハンダ付け、組み立て……と熟練のおばさんたちに負けて悔しい思いをしたそうだが、今は北野さんが指導役で電子機器組立の国家技能検定突破をめざす。すでに一級一人、二級一〇人、三級一一人が認定を受けた。

「電気のことを知らないパートの人たちにも一から教えていますが、みんな熱心です。今は最先端の電子機器部品の修理、改造が当社の得意なところですよ」

北野さんはパソコン関係も得意。普及し始めると同時に取り組んだ。

「前社長は厳しかったのですが、健常者



腎機能障害で人工透析を受けながら仕事に励む光永覚さん（42歳）

と対等に怒るしほめるので、やりがいがありました。できないことをお互いにカバーしあうことは自然にできていると思います。現社長とはずっと一緒です。考え方も性格も違うと思いますが、めざすところは似ていますので、非常にやりやすいです。厳しさは、前社長と同じくらいですね」

「光永は人工透析を週三回。勤務時間は午前七時から午後四時までと考慮して、その後に透析しています」と社長。

光永覚さんは入社二五年。体調を崩して一時退職したが、復帰した。プリント基板組立工程で機械を操作する。

「アビリンピックの電子機器組立に出

場したのですが、なかなか練習する時間がなくて、仕事との兼ね合いがむずかしかったですね。体調は大丈夫です」

大石孝裕さんは、自動車金属塗装の仕事から転職して一五年。膜厚計という装置でメッキや鉄板の厚さを測っている。

「立ちっぱなしの仕事は無理でしたから、こちらに入りました。座っての作業ですし、エレベーターも台車もありますから、身体的には楽ですね」

「植松は手話が使えませんが、社内メールと筆談と口話で。恥ずかしがりやなんですよ」と優子さん。

アビリンピック千葉大会で金賞を受賞した植松譲さんは、〇九年度優良障害者厚生労働大臣表彰を受け、県障害者雇用促進大会で報告をした。

「入社して二五年。最初はおばさんたちに怒られ怒られでしたが、自分の技術のほうが上がって自信ができました。アビリンピック三回目の出場で金メダルをもらってうれしかったです。両親、会社、県の皆さまに感謝します」とあいさつ。川勝平太静岡県知事も拍手。社長も「すごいやつがいてよかったです、私も幸せな気持ちでした」

植松さんは社内結婚して、二児の子育ての真っ最中。「発表するときほどきど



膜厚計の組み立て、修理を担当する大石孝裕さん（58歳）。小児まひの後遺症で下肢に障害がある

きました。仕事は細かいですが、おもしろいです」

## 新たな事業を展開へ

九三年、先代社長の時代に障害者雇用優良事業所として労働大臣表彰を受けた。七十二歳を筆頭に高齢者も働き、障害者と高齢者で雇用率は二五％。HPには「障がい者雇用について」の項目を掲げ、深澤社長は支援学校などで話をする。

「年四、五回、中小企業の社長さんたちに一時間半ぐらいお話をしています。少しでもPRして、一人でも多くの障がい者の方が中小企業で働いてほしいという思いからです。そのためには、社長さんに障がい者雇用をしたいという気持ちになっていただくかなければなりません。まず実習からスタートしましょうとお話します」



障害者雇用で感じていること。

「普通に仕事をしていますから、障がいのある人たちだという感覚がないですね。仕事熱心で休みも少なく、まじめです。社員は心のバリアフリーになっています。知障がい者は、何回も繰り返し繰り返し教えたら、健常者に負けないでしょう。同じ作業の繰り返しは強いですね」

ISO9002、ISO14001を認証取得して品質や環境にも配慮している。

「持つてなくてもすばらしい会社はたくさんありますが、中小企業としては、一つの指標として営業がしやすくなりませぬ。一つでも大手に勝てるものを持ちたいと思い、小さくてもきらりと光る企業をめざしています」

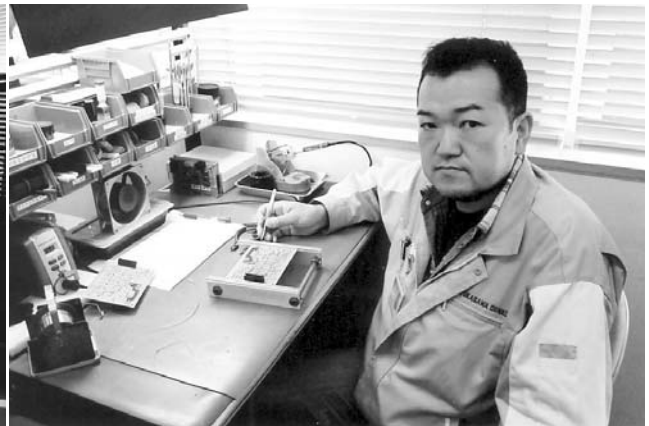
社長はお酒を飲まない、たばこを吸わない、ゴルフをしない。

「前はものすごく飲んだのですが、二年半前に止めました。飲むことやゴルフを止めたら、一人雇用できますよ。休日は家の掃除で半日使います。連休のときは紅葉を見に行ったりコンサートを聴きに行ったり、そのほか障がい者関係の映画や音楽のイベントなどに出かけています」

春にお花見、夏はバーベキュー、暮れの忘年会はホテルで飲食してビンゴやカラオケを楽しむ。



プリント基板の組み立てラインを管理する  
聴覚障害者の水口美佐子さん



聴覚障害の植松譲さん(42歳)。アビリンピック全国大会「電子回路接続部門」で金メダル。「町工場が大企業に勝つ」を見事に果たした

「辞めてもらうのはいつでもできますから、大変な時期もがまんして助け合って頑張りました。今は毎日やる仕事があるので助かっています。悪いときがあると、絶対良いときがくると思うんです。仕事がヒマなときは社内を片づけて環境を良くして、仕事が入るのを待っています。今日までよくやってきたと思います」と優子さん。

息子も後継者として入社。社長として、社員に願っていること。

「一番は志の高い人づくりですね。人が喜ぶことができるような人間づくりをしたいと思います。目の前にゴミが落ちていたら、自分から自然に拾える、困っている人がいたら、自分から自然に助けられる。人として当たり前のことができるようにと思っています」

二月から新たに清掃業を始める。

「知的障がい者の方と高齢者の方を中心に個人病院のトイレを清掃する事業をしたいと進めています。『ちょっと体の悪い人と、ちょっと年の多い人が働く』とうたいます。トイレ掃除から始めて、清掃事業を広げていければと考えています」

会社から富士山が見える。桜咲く春の風景が好きだというご夫妻。国内の製造業を取り巻く環境は厳しいけれど、ぜひ生き抜いていってほしい。